台湾の働く女性と子育て事情

勤業衆信聯合会計師事務所
（有限責任監査法人トーマツ駐在員）
宮川明子

既婚女性も普通に働く台湾

「63％」とは、何の比率かお分かりだろうか。それは、当会計事務所の台湾全土にいる3285人の内の女性比率である。もう６年前になるが、日本にいたころの監査法人の女性比率はざっと20%から30%くらいだったと思うので、いかに台湾の会計事務所の女性比率が高いかご理解いただけるだろう。クライアントの会計担当者にも女性が多い。日本以外のアジアでは、会計は女性の仕事と言えるかもしれない。

以前出張したタイでも女性が多かったが、ある程度の責任者となると男性の割合が増えてくる。当事務所の場合、責任者レベルでも女性の割合は高く、子どもがいる女性も多い。最近の正大聯合会計師事務所の調査では、アジアでの女性幹部登用率で第１位はフィリピンの40%、第２位が中国とタイの38%、第４位は香港の33%、台湾は第５位（世界では24位）で26%であった。ちなみに、日本は43カ国・地域中最下位の９％である。日本と台湾で何が違うのか考えてみたい。

家事理由では仕事は辞めない

日本ではまだまだ共働きに対する理解が低く、子育てと家事は主婦の仕事であり、まずそこから脱するのが難しい。やっと仕事を得ても、家事をこなしながら仕事もすることが一般的である。「子どもを小さいうちから人に預けて働くなんて、子どもがかわいそう」とは、私自身が20年以上も前に周囲から言われた言葉である。古い日本では、本音は「男性の沽券（こけん）にかかわる」ということであったかもしれない。今は死語となっていることを願うが、家族や親戚からのプレッシャーは意外と手ごわい。

子どもは母親とずっと一緒が幸せなのかどうか、私にはいまだに答えがないが、とりあえず無事に育ったわが子を見ると、そんなに悪くはなかったはずと自答している。

一方、台湾では共働きは当たり前で、妻が家にいる家庭の方が珍しい。妻が残業で遅く退勤するとき、夫が迎えに来て仲良く帰っていく姿をうらやましいと思ったこともある。「仕事の量や残業が増えて、家庭に負担がかかるので仕事を辞めます」と言った日本人スタッフがいたが、それは台湾人からはあまり聞かない理由である。「自分のやりたいことが別に見つかった」とか、「自分の時間が欲しいから」とは言われるが、いわゆる家庭の事情がどうのという話は聞かない。社会の中に理解がある（反対がない）のだと思える。また、「家族のために我慢をするのは良くないことであり、経済力をつけ自分の能力アップをする方が重要」と台湾女性から聞いたこともある。

また台湾では、夫が子どもと一緒に妻の会社の社員旅行や行事に参加することも多い。夫が子どもの世話をするのもごく普通である。小学生と３歳のお子さんのいる女性が日本に５日間の旅行に